

炎の盾

知ってのとおり、大いなる四つの盾は、遥かなる太古、熟練の盾ドワーフのクレアトクと若き竜ネハルによって鍛え上げられました。クレアトクの業物に、竜ネハルが炎を吹きつけ、奇跡の品を鍛造したのです。

竜とドワーフが協力するなんて、今の常識では考えられないでしょうが、当時の両種族は、友人とまでは言えないにしても、少なくとも同盟関係にはあったのです。大きなトロールや大地の精など、両者に対して非友好的な種族もいましたから。

これらの盾は方々から注目を集めました。〈星の盾〉〈絆の盾〉〈嵐の盾〉……そして最後の四つめは、闇の盾と呼ばれることもありました。というのもこれこそが、盾ドワーフの暗黒時代到来のきっかけとなったからです。ただ制作者であるクレアトクとネハルは〈炎の盾〉と呼びました。



新たに完成した業物をその目にしようと、好奇心と期待を胸に、ドワーフのみならず竜も何頭かやって来ました。その盾は漆黑で、天鵞絨のように煌めき、わずかに縁飾りがありました。

クレアトクが起動させると、いきなり盾は紅蓮ならぬ黒鉄色の炎に包まれました。竜ネハルは悲鳴を上げました。炎が急速に広がり、翼を焼き焦がしたからです。でも、どうしてそんなことが？ 竜が燃えるはずはありません。竜の炎より熱きものは存在しないはずです。

ネハルは、かつては友だった裏切り者の目の前で崩れ落ちました。集まっていたドワーフたちも、蜘蛛の子を散らすように、その岩室から逃げ出しました。けれど一部の頭の切れる者は、ほくそ笑んでいました。この盾の戦術的な価値に気づいていたからです。

「黒き炎！」

そのなかの誰かが、熱に浮かされたように叫びました。欲深く憑かれたように炎を見つめ、戸口を塞ぎました。

岩室の中心には、笑いながら歌うクレアトクがいました。炎に蝕ばまれてはいませんでした。盾が、その保持者を守っていたのです。

恐怖に駆られ、他の竜たちも逃げようとしたのですが、かないませんでした。ただ一頭だけが包囲を抜け、長々と続く隧道の奥まで逃げ伸びました。洞窟の肺ともいうべき筒状の隘路で、ドワーフはそれをバラトと呼びならわしていました。竜はバラト内を、らせんを描いて上昇していきます。同時にその竜の意識は、全竜が眠る魔法の領域クラハルにまで到達します。

「目覚めよ！」

記録では「この最後の盾は、ドワーフから全竜族に対する宣戦布告に他ならない」とあります。覚醒し、意識を融合させた竜たちの心は、ドワーフの黒き炎に対する拒絶と恐怖とで満たされました。生き残りの若き竜は「この危険な兵器が量産されないうちに、盾ドワーフを滅ぼさなくてはならない」と仲間の竜に働きかけ、受け容れられました。

かくて盾ドワーフと竜たちの地下での大戦が勃発し、両種族とも絶滅に瀕しました。決して終わりのない戦いです。両者の疲弊による膠着状態の果て、それでも盾ドワーフ側は徐々に態勢を整え直しました。

竜たちはといえば、この何年のあいだに死ぬか石化しました。ただ一頭を除いて。この若き竜は、〈炎の盾〉の力を目の当たりにしていました。したがって決して、その怒りの炎を消すことはありえませんでした。この竜は戦争のあいだに大きく成長を遂げ、より凶悪により強力になりました。すべての一族の力を受け継いだかのような存在となったこの竜の名は、タロクといます。